



俳諧饒舌録

上



元木綱大人著

俳諧 饒舌録

ジヨウ セツ ロク

全二冊

本公書 哉著 饒

舌と 歌を 出さ 哉傳 燈録

言山の 語も こと 川く 予

其書 哉 見する 子 接 證

精博 俳門 如 秘 鍵 文 津

の 瘡 從 伐 るる 益 饒 舌 也

謙辭のこ嗚呼公の未
如妙なる藝あるを張儀
の古とさるるの未の在不
哉問はるるを賈遠の古と
さるるの耕のこつは百
萬の師と退るるを七十

の城も下とさるるの世の
俳家者流三百六十の書
を讀むるの古なるを
強ひらるるの
文化の元夏五
冬烘居士識

饒舌録 上卷

凡例



てしきをばのどけひひ白王國のなりひひて歌よまればさる
 はまれさしぬ河あもあつらそれらりて定ふふちんあれは河の
 かと末とをかあ(含ふ)或をさき初学ひのともかうてふ
 をそらつあべきを切字とのりつあり切字とつひにそこの
 るるあをいふされがるるらり切字とつひも同しこと
 かりそが中は余情をきくめやなふなふ川
 引てかふで引てかふ引てかふのきをきふのきをきりせば
 ながらるるるるを切字とつひに余情をきくめらるる
 とつひに余情をきくめらるるらおのがまらるるらひはれまはと
 あふれはけの例を以てし可いことごとし本字ゆき切字格
 きれるはきよ切字格とつひにきありとつひもさし下
 とつひに切字とつひにきありとつひもさし下

ゆ急切る格のまゝるこゝつらきけれ——是も切る格を
 あり〜りともさへ〜り〜切る〜亦ハ切る〜亦ある格を
 切る格を〜亦ハ切るやハおろ〜句づめよりのさの
 ぢり句づめとい

- 歌ハ 一編 □
- 二序 □
- 三歌 □
- 四曲 □
- 五流 □

- 爰句ハ 一序 □
- 二歌 □
- 三曲 □

け一平の巫を句づあ〜ひけ□平は巫を句の中写とい
 亦ハ遍序歌曲流のみつ爰句ハ一序歌曲のつろ〜亦ハ
 三十一字のまを爰句十七ま〜こむ〜い〜あ〜い〜あ〜
 あるれハ詔を遍流とい〜まハ爰句の余情を身りりれ
 されハ爰句乃〜ま〜ま〜の〜が〜れハ系情さ〜る〜
 亦ハ爰句も句つら〜切る〜ま〜ま〜あるもの〜句の中
 ろ〜切る〜ハ〜れ〜あり〜切る〜ハ切字を上〜文〜つ〜切れ

字とい

くまはつぬふむゆるり〜ま〜
次五

まを切る〜り〜あ〜け切る〜ま〜よ〜文〜

くや ちや ぶや ちや づや ぬや ちや ぶや
 んや ゆや るや りや づや ぬや ちや

といあを切るや〜つら〜切るやを〜と〜文〜つら〜ま〜
 くらがおに〜て切るや〜切るはま〜れ〜一〜あ〜あ〜
 切引合てる辰切字ハ外よりか〜船のむまび詞あるま〜の〜

や 急〜〜どた〜や ちの〜
去来

是ハ下よりよ〜ち〜辰〜ま〜あ〜の〜ま〜く〜
 た〜く〜や〜切ら〜り〜か〜お〜を〜を〜り〜を〜ま〜り〜あり

新古今
 おのがま〜こ〜いつ〜あ〜や〜月〜言〜神〜あ〜山〜の〜ま〜あ〜
 是〜ら〜ち〜〜〜お〜月〜や〜神〜あ〜山〜の〜山〜時〜
 おのがま〜こ〜いつ〜あ〜や〜と〜切ら〜ま〜

ま中 狼の跡をいけま中 漢子も 史邦

是も 漢中より狼の跡をいけま中 切り

貫之の案

ま中 梅は咲きまじり 春よよめ方あそんといま中
是ハよきなりと切中 格あれどまハ下つてきて
ま中 切り 前ハ切中 格まじりついでお母より
ま中 切中 格まじりあるハすれり

ま中 枯をてく 玉相は 恥ぢ中 かなんか 枚風

是も 何をてく 枯をてく 玉相は 恥ぢ中 切り

旧花

ちる花もあそんや 玉相は 恥ぢ中 切り
是もいそこのころありまじりまじりまじり
もいそこのころありまじりまじりまじり

よ中 老が牙ふちるをばい中 切り 関夕

是も 老が牙ふちるをばい中 切り

合案

ちるにまじり 玉相の 跡乃あど波いけ中 切り
是ハ袖のぬれもいそこのころありまじり
のあど波いけ中 切り

つ中 我ホしきぐ宿も来つ中 切り 貞徳

是も 我ホしきぐ宿も来つ中 切り

新古今

ま中 山乃新く 松契り 玉相は 恥ぢ中 切り
是ハ山のその山乃新く 松契り 玉相は 恥ぢ中 切り

ぬ中 ちり 未旦の花もちりぬ中 切り 妻雨

是ハ ちり 未旦の花もちりぬ中 切り

新古今

ま中 ちり 未旦の花もちりぬ中 切り
是ハ ちり 未旦の花もちりぬ中 切り

是し何れもぎく一声のけし横くやと切り

千載

こまねぬやまのぶやいふあまぬらけさみとすーぬくれのま

是いおもぬるのくこくすーあなれのまはるぬやいふまのぶやと切り

むや けし何れもぎくやと切り 其角

是し何れもぎくやと切り

古今

波のうらげんれがむぞ。うらたぶ袖よまふりうんや

んや

けんやとつふい波のうらせこれに玉ぞみだれらう
うらたぶ袖よまふりうんやいそまをうらふよと
もたうれくもあうドとくこのころやいのま
まてんやまやめやとつふい波のうら

のころやいのまあるまのく

ゆや 加鳥卵乃肩小堂ゆや更衣 乙女

是いおんかろまの肩よそのゆやと切り

救あぬまがと山辺のけしまは本はるがれのま声はつゆや

るや 宵はるまのやと切り 園指

是いおんかろまの肩よそのゆやと切り
夕の中ちま切りゆとめくーけまゆと切り
ま交るるいつるめるあるむくくるまのけある
あぶのたひのるまあうげ切り格のるい

知見降敷敷守ル持ル流光鳴ル
照折成宿樵回取賣遣配諾

あぶのたひ字のよみま切り格のるま持るるとん
はぐーけ敷ひのるをりま切りま切りま切り
つたもま切れまあうま切りま切りま切り

是ハ下より上へちへて一字をあれバかまひの
 隔をやハ山や花。朝らんと三字入てらんとして
 亦をはを合せせしめて二十の格にこれらよれど
 らて上は押のつらざる所の字をもあむれ終とあ
 べー詞を入てせよあるもその上よりけりりよ
 ちどびいて一字二字三字迄は限るもあれハ十八十九
 二十とよとらねて余情も四字の行ハ一のをざつた
 とんねべーと字の余情を入てせよのあハ

⓪ 風雅
 花やまき煙時うぬふト

是もまわりてまをさすれば時よぬ屋土の上は
 さゆるは風花やまき煙と多うと
 ちよあふん煙あふんと二字入てせよとけ
 入てせよとの例あれバあむよ二十の格ありとあ
 べーは格はせめて何れもあむも初め何れ
 第一とらよ一字二字三字迄は限りてことな

入てせよあり初め何れハ字の訓は切り格を
 かくぬ字よてあむらるを初め何れはし
 たりとあむ上よりけりりよとどびいて一字二
 字三字入るらとあハ

外十八 人よあを買せし我ハ年忘 ス ちせ成

是ハ外のとありあれバととるらとと一字入
 てて亦をん然合てせよとて十八の格にけむと一字
 入らるととると二字入るら上よりけりりは随ハあり
 上のとあり何れ何れの時ハ時來時とむむ格
 上のとあり外よとる時ハ 時來時とむむ格
 されバあむもととるらと

蒙此香や蝶の翅はたまりのま そせ成

といり是も外のとありあれバととむむびて何れけ
 やいなるあむらとととやととあむて何れのと

おくのこむて切れもろくぢひもせびこまをまの格
よあづろぬやまそまのまぐざあよりて
をやしむと切らひ付中りてせゆるあられ
ば文章よあれども所もあやうまいあ
まらぬ一むと一字のまを二字よらハハハ
まじ一しづらむとけりあまらり
しとなおひいさまひそ

外 十哉

山陰や 岩さるはれまきて復の外ある日くは声

是ハ河のまよりけりこれハ是も外のくりこ
声とつ下へまと一字入てせま

又くぢひのやよりかろぬハ

や十九 水鷄あくと人の心をや依る泊

是ハくぢひのやよりかりこれハ泊とあうく下へ
まらと二字入てるこてあをを代合てせこ

て十九の格くくぢひのやよりかりてむらとあれるハ

古今

あー川の山にまき我ぞ君よまらつづのくま

又くぢひのやよりかりて初め河をぬくハ

宝治百首

や けまハ山のつまはをあてそあしくるまやあまのね衣

是ハ衣とあうく下へあると二字入てせま

○切らや 雀子の歌も思むや 秋乃風 式之

是ハ秋の風もめ子のむげもくむや切らやま切
らけ切らやの格とあうてえまハ下はむぢひ河
ある格と川合てままのまは乃列あるをえま
るまのこ

ぞ十九 伊勢かきをさぬぞまこの神和 其角

是ハぞよりかりて初め河をた和らりく下へ
あると二字入てるとそをえ代合てせま
て十九の格く

古今 神を月時多ありおるあはれ葉のあまの宮にちるのぞき
 是もぞよりうりて是とありく下一ありと
 二字入てはこと

○切り初 たみめ我手の紙合 善良

是ハ紙あまましくみめ我手の何と切りぞく
 まて切り格の上のうりまうりげ只を推しあへ

〔数十九〕 春のあはれ初瀬乃堂終 善良

是ハ数の河もてたれりとしすりかりて終
 ありく下一あると二字入てるよとををはを
 入てはこと十九の格く

古今 是もいぐと数の河よりかりて波とあはれ
 下一あると二字入てはこと

○切り類 猿丸の山ぐげづご綱代守 正義

是ハ綱代もさる丸乃山ぐげづごし切り切り類
 と数のまの下づくとを合してはこと

〔数十九〕 されをこ持荒れ記我の宿 善良

是ハ記をよりかりて者とありく下一あれと二
 字入て記してをを合してはこと十九の格
 く又記をよて切りしといふことハ例ありこそと
 ありく下一あり十九二十の格あり

〔数九〕 玉糸飯ハ推し蓮小 作者不知

是ハこそとありく下一もれと二字入てれとてをを
 は合してはこと十九の格く

昔撰 あら乃海小年ハ推しめも心の上のくあはれ
 是もこそとありく下一あれと二字入てれと

ておをばは合して夢を

夢を白もこそとありしはいつらもくはれ
こそとありしは夢を白これあれあまも河を
入て夢
まもあれがれはしるべき河は首尾といふ
物の中一か
ひの波はておをばとありて

● 帆こそは松のあまひよりんゆ ね

とあれども是は樹あまきりりしはけれと
入て夢の
ひの波はそりしは夢及ぶがごとあり
初のを尾といふ物
おまもひのりしはきこしりお
あまもひのりしはきこしりお
あまもひのりしはきこしりお

● 田子浦浦まうちぞてしれがれはこそ

けこその中へ河を入て夢んまはれはれ
と源人や
又赤くはましくよめれれといふ人や
河の玉の結

● 千五百あ 荒れまなりくあも志ぬ
あまの君も千はま喜のらま
かふてこそ
これらうしはのそむらふく

と何りもははれその下へ
けしと四字入て夢の
かこし
こまも二文字
二文字
の余情を限るこそんはべ

外十九 叶書も又より返し おあま 170 扱風

是はもよりかりければ外
のよりと本とありし
下へしと二文字入て
あておをばは合して夢を
まも十九の格と

外 續古今 明石がくはるはを
けてえしはあま乃上
も沖は白波

是ももよりかりければ外
のよりと本とありし
下へしと二文字入て
あておをばは合して夢を
まも十九の格と

の十九 おらあまもま紫の
ま紫の日の光 170 扱風

是はのよりかりて
荒れまなりくあも志ぬ
あまの君も千はま喜のらま
かふてこそ
これらうしはのそむらふく

①古今 枯枝花あめ色香もむりーまおあまたよる月の叶

是ものよりうりて月とありて下へあると二字
入てゆきと下をむきび記してむきふのハフの
此のふあふげ記してゆきやうある西をの
とると又がとゆきやうれ西をのとゆきの
をうて老の枯ハ神の西をつあぐ松の風を
の井、あぐののを考ののとゆき又がハがのや
類こそと卵とをぬるこつてげよあゆりも
時ハ卵ハうき格ぞの卵類こそハきき格ふ
れハ卵ハき格の方の西をび記してむきふ定り
なり又のしううき格あれハ格ふづれてむき
ふこてあまふあふげ格ふづれてむきまを
格とゆき格とい

ニニ格 玉つこまなまむしとむきづるよりもけとむきづ
るは志づさゆまゆゆの時ハけとむきづり
むきぶこむきづて卵のうりまもらき格ふ
な格ありとゆきづーけ格も同下格のなむ

割格 枯枝下鳥のときりけり秋の香

是ものかりあれも秋の香枯えさまゆきまのときり
けりとむきびて切りけり記さハ 涙とげり香かの
遠里枯人といふけをるをらめハ 枯えさまゆきまの
ときりまゆきまの秋の香といふ白く志るをある夜の香
話ハ季吟素堂桃青三人りて 枯枝まゆきまの
ときりまゆきまの詞をさめてあふはようん記さも人とい
まゆきまの涙とげゆくとゆきまのあふはようん記さ
涙とげゆくとゆきまの遠里とゆきまをつめこりとゆき
まのめをさうして正風のふたれらけをるハ西記と
人のうきま

彩古今

ちりかふる系まがれぬ大井所づれをまがれぬの柵のり
是もまがれと敷よりぬも柵のりありとる下へ
あつんと二字入てせきこ

源氏集系

お純そそに思ふるまにんのり人のゆくハまらや者のま水

是ハこそよりかて二のちつあをまのりとありと
下へおれと二字入てせきこまのりハ ちのち
あままそそハま守あつたあれみ一人乃れ
まハまらやと加まやま切しり

忠孝百集

さもそそハおれのり 教ハつひあがらまらぬ神のこのりま

是ハこそそのまきひ河をど。又まおれとつよは
をふくませとる諸も是もまの格と目トあが
くれハむまび河をふくまら格とらま

彩古今

ろづれへのけけの宮ハ非まびてまきひのりなる浦の柵のり
是ハ河のまよりかりされがハのちりのりと目ト

外松

あく玉の年まららりのりまらまらのり柵ハまらのりまら
まらまらのりと二字入てせきこ
下へありと二字入てせきこ

外合

まら人といふのり理のりまらまらのりのまらまらのりにまらのりまら
是もむよりかりされがハ外のりのちりのりまらのりと
ありとるまらありと二字入てせきこ
申す人のちをとりまられがまら人といふのり理のり
ありとるまらまらのりけけハ格のりまらのりまらのりまらのりハ

外十九

是ハつと斗のり花のりのまらのり山 貞室

これらも白の中らまら切しとまら斗のり花のりのまらのりつとら
まらまらのりまらのりまらのりはまらのりちまらのりて花のりのまらのり
まらのりまらのりまらのりとまらのりまらのりとまらのり十九の格あり
はれハとよりかりとまらハ外のりのちりのりまらのりとまらのりまらのり
下へありと二字入てりのりとまらのりまらのりまらのり格と

け外くすくは格と致をらて受らふかを引合致
 白かあるて亦を波の限りをこえきられハ亦あつて
 白はべー抑致文ハそのよりく已事かあつて
 白はまらふハ何れもあをす致すハ初きひのともか
 まらふとされバもけつてまらふハ初きひのともか
 く致もつてまらふとすや致とひまらふと

饒舌録上巻目録

そのや致ハ致例	十八のひら
ぞ致むまび辞	十九のひら
ぞ致部	二十のひら
の致部	二十一のひら
や致部	二十二のひら
り致部	二十三のひら
が致部	二十四のひら
致初致部	六十七のひら

ぞのや疑例

ぞ 下ふむまび詞あるぞをり

の かつか結のふあふびぞとりまきやれふ又がとりま
まやれふをのとりまのをり又句づりまのり
もりあり

や 下ふむまび詞のりまがひのやをり

疑 下ふむまび詞のりまがひのやをり
かぞたれたがたそかどのたひまがひの
詞を一つ疑として下ふむまび辞ある疑詞
をりあり

○疑詞の下は文字も文字又ハレもとあるハレにて
下付むまびのりまがひのたを疑ありとんたべーを中

穀の下よこしつりてもも下よ穀のまのつきて下に
むまび河のあるもこれれあれも穀河の下よもつり
いまで下のもまびよ不及たを河ありとんねべー

く。く。も。た。れ。も。ソ。ソ。も。た。が。つ。も。も。ソ。も。
い。く。代。も。い。く。も。い。く。目。も。た。も。も。い。く。も。
づ。も。た。れ。が。も。ソ。も。も。何。れ。も。な。も。
い。く。も。も。山。河。あり。も。た。れ。も。も。

叶れひ穀河のあまも久字あふたを河を下のむまびよ
くわが

○呼上他と下とふ穀河もたをま紫なれば下のむまびよ
不及地は

古今

みちれくのあまぶちむりこれゆをみふれをわう我あうなくふ
是にま入もむいて他の人故まみふれをいふが他を

さーしーる穀河あり

けがのれま

全案

毛漢乃ままこの穀もたあふづつきせまふえゆる君がほ代うま

是にままこの穀の穀の穀もあふづといふまあれを
他をいふ穀はけごとく穀河あがう他のるる故
穀はたれいづくなをいふたを河あれが下の
むまびよ不及されればいふまのや 是にまは
かまぬりやもさうづべ下下系ももつともいを
るあり

○穀よいぞといふまナトゾといふまあるもたがま紫を下のむま
びよ不及又いぞまドウシテといふまあるも下よむまい河を例え

○穀よいぞといふまナトゾといふまあるもたがま紫を下のむま
びよ不及又いぞまドウシテといふまあるも下よむまい河を例え
イツマニヤラといふまあるもたがま紫なれば下のむまびよはうづ
けされも下よむまのやをあげまやうなるあいのいづま
も外をこそふまありてもさうづべ下下系ももつともい也

爰のハ言葉とドかきおゆおもし格の河のさしぬこしハ
くましくな

○穀河はつづくとりたまで下はむまびよ不及こ家切らま
ま イツレカ イツレブ とりまよそつひあうて下はむまび
なり

○け改よりそのや 穀ホの河乃本とおとそとのさ 爰のハ被を引
合て足も先をよめそのや 穀ホのむまび河を元は集て足まは
六世下よりそのや 穀も外のよりむまびも同ド一河とこは

そのや 穀ホむまび詞

六 く
おくひくこぐせくましくかくふくさくけり
たくやくおくとぐこくこのぞくさくた
いそぐたたくおむく
け改ひの下をむといそれぬぐ改ひのくそのや
穀外よりかす時むまび河同ド一河ある物あり

六 ま
こまさいまきをなぬ やどきまけり ちとん
うまいかまをてけ ちめをのまをちん ころま
け改ひの下をむといそれぬぐ改ひのくそのや
穀外よりかす時むまび河同ド一河ある物あり

六 つ
まうまううつうつ ころまこげつ ころま
け改ひの下をむといそれぬぐをりふけ改ひのつハ
そのや 穀外よりかす時むまび河同ド一河ある物あり

六 ぬ
ちくぬえぬまぬぬ いえぬかまぬ ちぬぬぬぬぬ
不ぬぬいふまふく格あれどそのや 穀外よりかす
時むまび河同ド一河ある物あり

六 ふ
つふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふむまふさふふいふふあふふふふふふふふふふ
かふふふふ
け改ひの下をむといそれぬぐをりふけ改ひのふその
や 穀外よりかす時むまび河同ド一河ある物あり

六む 空よちれ敷ぞはむむるみぬ 宗祇

是ハ空の花をよちれあられぞつむと切らり

古今 我唐ハ都ハつらむ志をまむ世を空居山と人ハつらむ

是ハ世を空居山と人ハつらむ我唐ハ都ハつらむ

六む 今ぞえん 跡生くつる月よ花 宗英

是ハ跡生くつる月よ花今ぞえんと切らり

於迷 今ぞえん 跡生くつる月よ花今ぞえんと切らり

是ハ少女の袖の赤ぞつらむとまてくどきあき出雲の

六む 郭公赤きぞ来らん 郭のる 去志

是ハ郭の西ほき来らん郭のる 又ハシ のまてく

新千載 是ハ都のまつよむいものつらむと切らり

是ハ四の匂ハの白牡丹とまてくと切らり

古今 是日牡丹よまてくつらむと切らり

千二百五 是日牡丹よまてくつらむと切らり

是ハ都のまつよむいものつらむと切らり

古今 秋来ぬとあはれやうよんそわなも風の音よぞおどろかぬ。

●このをさざるあまのい

●ちるたびは思を捨ひぬけしは 借言
是いざよてくる時ハぬくともきき入きとて
をぬくとむまひくくとのまは 紫のうりよぬ
又つとあまひなる 暮格あれぞ ぞくひのやま
よの暮格あり

る 吾は日ハ舟のこをまをりたり。 羽立

古今 夫ことせむひけぬを本れるより花とるるかきちをかりける。

る 夕涼おひをづる 藤乃とさ。 洞月

是ハ夕暮み流のさくをひをりつると知り

秋 暮れ一の川とをつひたうれつるのまをちよ人のあまの川
是ハついでよのあひふ人のあまの川よまきれ一の川
とぞつひのあまの川とぞつひのあまの川
とぞつひのあまの川とぞつひのあまの川

上よりをのや敷よかる時つる。ぬくとも
上より外まうる時ハ つぬ ともむ格

る 子城連をさしとぞ。 穂船舟 芝山

是もくひ舟子をつれてしをさる。と知り

千載 山とつるをさる。つりつるをさる。と知り

る 木れ葉もる音をさゆ。 暮山 莫山

是も暮山夜木の音をさる。音をさゆ。と知り

厚保 秋風よさをれしる。存るのハを井せるかよあまゆ。

上より 外のうり此時ハゆゆとあま格

金葉 吾もくもまひもをけ郊の花さるれば月の氣もよ
けゆとあまのこをさくまつぬふむるを
字上ま交てくはゆ けはゆ けはゆ
いふ人あれども志うらねてハとくふりあり。

の註部

くもつぬふむん 現き

六く 春能る日私よあはれ風のふく 宗基

是ハのよりかりてくともむまびてかたりのはげごとく
ぞといふまきやうある雨をのとりくるをうふ又うつめよ
くるをむつめく

古今 春こそは花とやえん。白きこのねるえぶまうふひふあつ

六ま おきくれ心ごうけのまうたさ 仙仁

是ハわかづたさおきくのこころごうまを切るとまこ
うつめよりかりこり

六つ 渡守よぶををりら 晴乃ら 定香

古今 渡守はつとよまきやうれをのとり
人忘れぬやうにてあれぬ。あまういこのおもつけこり

不ぬ 志ぐれ孫バ又松風のちぶおうぬ 小枝

是ハのよりかりいれが不れぬまむまびて切こり上り
外のよりあれがむ又トとむまぶ格く

古今 みずせの山の白きあこりけて入す一人のおとられせぬ

六ふ 京紅染世を年能月とて中宮 文神

古今 是ハ倍中ち系つくーまのの月とよと切こり

夕暮や秋のあをれをこつらん入神よあはれむきそふ

六むん 鳥籠のまめ見つらん 郭公 季吟

是もほくまはもくごのくまめつらんと切こりあま
けをの洞の上よくまびのや又巖河あくてはまの洞ま
いとまふげといつれどん引んハ切れもつまもまら
格あれバソぐれのみまびふもあつとらねるー 此をより
かき時ハらんハらあせんハせめけんハけめあんを

交格 新古今 むむぶるみみれぬく山の井れあふも月のささきまき

聖き ぎやう水の掬ふ糸交中の声 鬼貫

古今 是ハ虫の声は水のまきとあまきとわたり

古今 ひとりてあを思ふ秋の田乃稻糸のそよとつる人のあま

交格 梅一まん一人程のあてき 嵐

交格 古今 秋の秋をまがらみやて吹麻の目ハ見えまき音はやんこ

人きおもハ秋の風あり 無名尼

ま 又こがもつひ糸のうらのあま 野水

建保四年百首 のがかり此津舟のまきれ秋も因のよりかりて
らーとむまひるる髪らわとび津舟のまき
又よがし舟迄の髪あし袖けて舟将の人乃かざりたるら

の 十九乃格

十九 くらよ寝て飯みれ夜忘の年忘 文考

是ハのくりにまき年忘とあつて下(ま)と二ま
入てるともをえ夜合てつとまて十九の格く

十九 梅あそ木鞠ふれあめのとろけ汁 文考

是ハあま書ハ乙外クは戸くおもむくととありて後列
のちふれバ梅より 若葉より まり子れあめのとろけ汁
よきとあまを此旅よよまおろけととあまをを
ませより 是ものよりかりされバまけとありと
下よまきと二字入て聖きとてあをえ夜合てつと
まて十九の格く

十九 當帰かりりあれハ塚のまきまき 文考

是ハのよりかりてまきとありと下(ま)と二ま入てつ
とまて十九乃格く此ハ凡例の中よこれバあまを

いひかきまじりの格

いひか

雪月車をもえよ僧の車坂

空山

是ハ花えよ僧のくる。とつとあも車坂へえかきまじり

の字留格句

いそせく秋も魚ぬる流柿の

宗古

是ハ流柿のいそせれて秋もへぬらう。と秋のまのうおしぬらう

老の身まをくもろれ散花の

旧月

是ハ老の身まをくもろれ散花のまもろあつとありこり

古今

吹まよりふ神風をさむみ秋萩のくろり。ははく人のくろりの

是ハ吹まよりふ神風をさむみ秋萩のくろり。ははく人のくろりの

好忠集

神し

神のまよりいそせり。ははく人のくろりの

是ハ神のまよりいそせり。ははく人のくろりの

いそせり。ははく人のくろりの

ははく人のくろりの

ははく人のくろりの

ははく人のくろりの

ははく人のくろりの

ははく人のくろりの

ははく人のくろりの

⑥むん 梅のや 前給く人をもむらん 其人

是ハあがむるや 梅のや 前給く人をもむらん 其人

⑥むん 中ぎく 山や くれん ぼんぼり 一髪

是ハあを移し 中ぎく 山や くれん ぼんぼり 一髪

⑥むん こつあ づつ づつ づつ づつ づつ 智月

是ハくろの月 づつ づつ づつ づつ づつ 智月

⑥むん 夕日より や 書附け さん 公望の 處 才臣

是ハ夕日の 夕日より や 書附け さん 公望の 處 才臣

古今 たくしめい ちきと ちきと ちきと ちきと

古今 立田川 紅糸 みづ けて ぬぐ ぬぐ ぬぐ ぬぐ

⑥ろ たて 見ん 霞や づつ 大鏡 野水

古今 郭公 妻の 鏡と ちきと ちきと ちきと ちきと

是ハ我が 列れの ちきと ちきと ちきと ちきと

いらん ころ 煤掃 ちきと ちきと ちきと ちきと

是ハちきと ちきと ちきと ちきと ちきと ちきと

古今 鏡は 深き ちきと ちきと ちきと ちきと

ぬんぬ

る

陽炎やとりつまくぬるちの上

荷兮

ぬんぬ

る

八重葉やうら九日とむくまぬる

善瓶

是ハあがむるや。ハ似れどもねむらぶひのや。あれバ下の
ぬがよむきむひ。須をぞ一上のや。のさハとけりたり。是ハ
上よりつるてくや。をハ小如て。流の流り。さる下。魚イ
ハ。ま。葉もく。あ。九日と。葉。む。ぬ。か。と。る。れ。が。う。ぐ。ひ。の。や。と
き。こ。そ。え。や。け。ー

ぬんぬ

る

木曾流と流一ぎあぢや知れぬる

其ノ用

是ハりりぬんぬのさの。こけ。今。下。下。下。
● 本曾流とや。流。一。ぎ。あ。ぢ。を。志。し。れ。り。
とあれども。穀のや。より。かり。り。と。る。り。さ。ハ。理。こ。も
不及。例。あ。き。ひ。が。こ。と。こ。思。中。下。の。さ。か。正。一。れ。が。用。ふ。又
穀のや。の。を。取。も。た。が。り。ホ。る。る。流。を。く。さ。ふ。ハ。あ。く。げ

流氏

る

涼しきあぢを推量して穀つとあれバあぢやとあ

るんぬ

る

たごうれも雲やまどろも山

水枝

是ハいも山あがれし。る。や。ま。ど。ろ。と。切。り。こ。と。く。是。ホ
の。穀。の。や。乃。雲。ハ。正。一。これ。ハ。り。ぬ。ん。ぬ。の。ま。ら。む。の。及。ま
古。今。ま。う。む。に。ま。ど。ろ。の。り。こ。と。かり。け。ハ。ま。ど。ろ。の。や。と。ぬ。人。や。ま。ど。ろ。を
穀のや。を。る。と。ぬ。る。る。ハ。り。ぬ。ん。ぬ。の。ま。ら。む。が。い。と。指
く。り。是。も。人。や。ま。ど。ろ。の。り。ぬ。ん。ぬ。の。ま。ら。む。の。り。こ

る

まどろもやまどろあがむる田植唄

正秀

流氏

る

是ハ田植うらまを流もや。世がらあむむか。と切こり

是ハ。あ。ぢ。を。推。量。し。て。穀。つ。と。あ。れ。バ。あ。ぢ。や。と。あ。く。げ
又。中。下。の。さ。か。正。一。れ。が。用。ふ。又
格。多。る。る。り。か。き。ハ。世。新。の。こ。見。ま

や二十 是やらぬ雨をまきく人。下まみ 其角

是ハ下より上へ下へ入て下まみ是やらぬ雨をまきく人。とあるをまきく人。とあり下へ入るんと三字入てゆまきく人。二十の格と

や二十 庖丁おろしや嵐さくら網 小得

是も下より上へ下へ入て横網庖丁のあらしや嵐とあるをまきく人。とあり下へ入るんと三字入てゆまきく人。二十の格と

や二十 雨涼しきれおあや秋の風 宗祇

是ハ風とあり下へ入る。と三字入てゆまきく人。

や十九 月花の是やまの何事達 宗祇

是ハ達とあり下へ入る。と二字入てゆまきく人。九の格と

や二十 麻の香をまきく山やうきと紅葉 宗祇

是ハ紅葉とあり下へ入る。と三字入てゆまきく人。二十の格と

や十九 秋風れきまひ出てや波の音 木阿

是ハ音とあり下へ入る。と二字入てゆまきく人。十九の格と

や十九 小坊もや松よりくれて山 櫻 其角

是も櫻とあり下へ入る。と二字入てゆまきく人。

や十九 卯く回つりめりてやあけ音 小枝

是も音とあり下へ入る。と二字入てゆまきく人。

や十九 うきまきふもそてや猫の盗食 支考

是も盗食とあり下へ入る。と二字入てゆまきく人。

や十九 ともがけふなすやあけ枯尾花 支考

是も花とあり下へ入る。と二字入てゆまきく人。

や十九 みぞれある音や朝飯の出まき 盡好

是も音とあり下へ入る。と二字入てゆまきく人。十九の格と

いひの けけけ 千代美代や けり縄 可全

是ハのへつけよふ代よりつ代やとていふ言ふを
かざり縄いひけりよとていふ

いひ 山姥とつひまろや 立田姫 立圃

是ハ山姥とつひまろやとていふ言ふを
田姫いひけりよとていふ

いひ 裸尻ホ麻の白しや さまい取 伴六

是ハ裸尻ホ麻の白しやとていふ言ふを
取力いひけりよとていふ

いひ 紅葉せぬ心や まさまの風 宗祇

是ハ紅葉せぬ心やとていふ言ふを
宗祇の風といひけりよとていふ

令採 東海をさるかよつるる月の 約きとていふ言ふ

○新古今のうゝい 空船れあふ袖やよふあめんと
いふ言ふをさるかよつるる月の約きとていふ

○金葉のうゝい 東海をさるかよつるる月の約
きとていふ言ふをさるかよつるる月の約きとていふ

是より下ハむきび詞子不及やのくまぐをいひ

切るや 八例中つるごとく切字を上示交て

くやまや やつやぬやふやむやんや
ゆやるやりやまきや 尻をいふ言ふの
めや切やがおほくつるの中らあて切るハれ

くや 木うくれ 茶摘もきくや 郭公 ちせ茂

是ハ木うくれとて茶摘もきくやとていふ言ふを
ちせ茂の例ハ八例中つるごとく切字を上示交て

くや 春めくや 人をあはれ 浮城を糸 荷

是ハ人さあはれを糸りまめくやと切り

くや ぶり落しゆくや 廣中の麻の角 澤雉

是ハ廣中の麻の角より落しゆくやと切り

くや かざんまはれがうくや 田植笠 吐月

是ハ田うまはれがうくやと切り

くや 葉揺よ気よごきや 初鯉 高山

是ハ初鯉をよごきと切り

まや 作里木の糸をゆるまや 秋の風 嵐雪

是ハ秋の風つくり木の糸をゆるまやと切り

まや 糸まうらひ笠よかまや 枯尾糸 其角

是ハ糸まうらひ笠よかまやと切り

まや やがし染る山をさくまや 夕の月 し由

是ハ夕の月やがし染る山をさくまやと切り

まや 枯まてくまはれまや 女節花 秋風

是ハをまてくまはれまやと切り

まや 老の成不敷をばんや 夕花 園夕

是ハ老の成不敷の成ちるをばんやと切り

ハ朝や月や早ぬやゆや川や 里村や 八いりくま
な一されば凡例よひせる他句もこまひせるも同
ト句を出せりたが切字を文くををまする者あり
トの里諺ハ「マイ」のまき

つや まらやまはれくや 四月の夕山 燈外

是ハ四月の夕山まはれくやと切り

つや 十五日のつや 朧月も古手賣 之石

是ハ十五日のつや朧月も古手賣と切り

ぬ^早や 燕も時を去りぬや。苗代田 空山

是ハあそくら田燕も時を去りぬやと切らり

魚 塩魚の歯よをさりふや。秋の音 荷分

是し魚のくれ志ほ魚の歯よをさるふやと切らり

む^早や 迷栗を袖で洗むや。女乃子 秋村

是も女の子ゆがりを袖で洗むやと切らり

ゆ^早や 埋火もきゆや。涙り 恋の音 大森

是もあふぐり恋の音埋火もきゆやと切らり

る^早 新雪を踏みぬるや。夏を去 中破

是も夏を去る雪を踏みぬるやと切らり
る。ぬるつるらあけのあふあふのぬるぬるは
字の列はおのづから切格のるを持る。埋火も
のぬるぬるを交て白づあふあふ切らりやん白の甲る
と切らりあるはまくれ

り^早や 前よりわたりや。火桶乃 撥る 存美

是ハ火おけのふでんあふらありやと切らり

ま^早や 人はてよゆまや。矢瀬の郭公 拾栗

是ハ矢瀬のりまゆ人侍よゆまやと切らり

し^早や 柿色む日和れや。村時 彦川

是ハ村時あまむむ日和れやと切らり

● 雪よあふくもあきや。新雪を

是ハあふくもあきやと切らり

又切らやみゆらららげらる難のやあり奇小

あ^早 ぬる人をまつほの浦乃夕あまよやくや。けし鹿もこれつ

是ハやくもほつらるをやと切らり

あ^早 秋のやをききや。けし鹿もこれつらる山のも乃くと

是もきき日秋とつらるをやと切らり

かて切れぞとらうげとぬこけさハ山の塔乃
千重とれらるゝあるまゝとらうげとぬのあり
二のうれ上三々目又四のうの上三三目もまゝ
るやゝとらうげとぬのうれとらうげとぬのあり
まゝとらうげとぬのうれとらうげとぬのあり

下知を切を交てやとらう切を切てけやいさう款島のこ
あり

下知や 秋まづし下毎まむるや尻茄子 とき成

是ハ秋涼一とらうびふ毎まむけやと切なり

花はまづらふをぬの 秋まづし下毎まむるや尻茄子 とき成

是ハ上へちふとらうびふ毎まむけやと切なり

下知や 秋まづし下毎まむるや尻茄子 とき成

是ハ秋涼一とらうびふ毎まむけやと切なり

下知や 秋まづし下毎まむるや尻茄子 とき成

是ハ秋涼一とらうびふ毎まむけやと切なり

秋まづし下毎まむるや尻茄子 とき成

是ハ秋涼一とらうびふ毎まむけやと切なり

下知や 秋まづし下毎まむるや尻茄子 とき成

是ハ秋涼一とらうびふ毎まむけやと切なり

下知や 秋まづし下毎まむるや尻茄子 とき成

是ハ秋涼一とらうびふ毎まむけやと切なり

下知や 秋まづし下毎まむるや尻茄子 とき成

け下知ま切を交て和と切りいきて秋風の中とついで
 よそれとちういひてはまきりくるあまぐれは下知ま切を交
 て和のへも切やとついで一是をいひまつる和あらんた
 るはわぐりうぐい捨るやうは中も切和と定むる
 ばたきうくるあうのべーい捨る外とまべー。
 ○秋風の中は切和あれども中よいけやけよや列よ
 けやあふたごまきり切れを秋風の中はあぐり
 つきて和と切れは和や和月や和月やけあぐり
 は切れをうづめまて和もよやあぐりあぐり現玉のや
 ちれは切りこ

秋風のや

是はあぐりくまきり切やこ

むざんや。甲比下のきりく

をせ

是はあぐりくまきり切やこ
 切り秋風の中は切和のといふまきり切やこ
 句もむざんやといひて切やを下へおと流りまきり

けりては秋風のそよよとあれは流をわやく
 ばあぐりいひて秋風のまきり切やといひまきり

捨るあぐりくまきり切や
 是はあぐりくまきり切や

ぐらりとぬけ初る齒や秋の風
 是も秋の風ぐらりとぬけ初る齒やの切や

陪明や登のあぐり耳比穴
 是も登のあぐりいれ穴陪あけやの切や

ふらんまきりくまきり切や
 是もむざん山ふらんまきりくまきり切や

かづびい三井の仁王や冬もまきり
 是もかづびい三井の仁王やの切や

永き思や同ド半く破の波
 是は永き思や同ド半く破の波

是はあぐりくまきり切やこ

素丸

ちうや麻かる後の秋乃風 越人

是も麻かる後の秋の風ちうあやのと切り是もハ格
物息のまゝちうあやと切り

散も又詩うまのや 苔まはれ 吐月

是もまはれの花ちう又まゝあやのと切り

おとあゝまきほや 約子菜 探丸

是もつりほあ一あゝまきほやの切り

まづや 蓮まゝられて 居るん 湖春

是ハ蓮まゝられて居るんまづやあと切りまゝて
うめーやあゝあやれーやあゝあやれーやあゝ
たーやあゝあやれーのやまて切りや

まゝらや 松を花とも 社とも 素堂

是も松を花ともやあゝあゝあゝあゝの切り是ハ
了れるやとよか秋息のまゝ

涼しや 田まゝらけて 元來

是ハ田まゝらけてまゝらけり涼しやの切り
おげ下おらりとありまゝ上(おら)で切り、まゝら

名月や 緑を枕は合歡の産 羽人

是もひさを枕は緑のうげ名月やあと切り名
月やと切りまゝあやあやあゝあゝあゝあゝあゝ
と切りて下は切りあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
まゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

休まはれは せどあれや 素堂

是ハまはれはせどあれやあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

かく追もかゝるはや 不ー 湯水

是も下蓋かゝるまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

秋風や ちりまゝまゝの一葉より 蒼太

是もちりまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
かりまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

百日上花下あらし中きりや中ひり 其角

是ハ百日のあらしひりあらしきりやと切りこれら
花のよんをくくべし下のあらしひりへくるの文を

衣斗モ世モやモきりからモ花モ著モのモ長モ短モ 也モ有モ

是ハ昔がくはしものもとどりあられきやのとたしり

名月モやモ湖水モの水モ比モ良モ乃モ雪モ 仙瓢

是ハ湖の水比良の雪を名月やのと切り

是モづくモ今モもモ人モやモ夕モさモらモ 巨山

是ハ夕探これづく今も人の夕のと切り

森モのモ火モ煙モあモんモのモさモめモぬモ 其角

是ハ森の火煙あんのさめぬ

志モづモくモやモ虫モよモまモこモ入モ蟬モのモ声モ ちと

是ハ虫よまこ入蟬の声を志づくと切り

立モ出モくモ後モあモりモやモ秋モのモ音モ 嵐

是ハ秋の音立りぞうつりゆりやのと切り

涼モしモやモ夕モ風モさモふモ芦モのモ音モ 了阿

是ハ夕風さふあーの音さふ芦の音

おモとモしモらモ花モ書モあモなモむモ初モ經モ 暮冬

是ハ初らとおりら花書あなむ初經

今モハモ世モをモ頼モるモもモやモえモ乃モ蟬モ 且葉

是ハ今世の蟬今世をこのむけしやのと切り

萍モさモらモあモるモあモらモやモ彼モをモあモ ちと

是ハ萍れあむらうさくあ葉やこーやのと切り

既モハモ人モをモいモふモのモさモとモんモはモるモ人モあモれモむモ人モのモさモハ

既モ 既モ 既モ のさことんはる人あれむ人のさハ

はめ髪と旅の母や弱むうひ 荷守

是ハ弱むうひつゝかこも旅の母や弱むうひのと切らり

強あれぬ刀ささや村志ざれ 常秀

是ハ強あれぬ刀ささや村志ざれのと切らり

ちうらあゝ雪かき日や次子孫孫 涼甚

是ハ雪かき日や次子孫孫のと切らり

まみつゝぬ猿のこゝろ也に雲火燧 木阿

是ハまみつゝぬ猿のこゝろ也に雲火燧のと切らり

新秋や衿は布子むすみの 木阿

是ハ新秋や衿は布子むすみののと切らり

あはれぬ小桃とあさき草の餅 木阿

是ハあはれぬ小桃とあさき草の餅のと切らり

○款息のやハ款息のまよひきて切らり右の能くまよひきて切らり

形古今 あつとんてことごとくもあつとんてことごとく 五月あつとんてことごとくもあつとんてことごとく

千載 五月あつとんてことごとくもあつとんてことごとく 五月あつとんてことごとくもあつとんてことごとく

これらよなきまよひきて切らり又款息のやとよ

款息のれや かもやのやまのまよひ切らり

れや 時ハ今花のまよひや風もれ 宗徳

是ハ風もれのと切らり格あがり下より上へうらうと

風もあつとんてことごとくもあつとんてことごとく

切らり格あがり下より上へうらうと

れや 西風くふあゝ安寝が系なれや 其角

是ハ西風くふあゝ安寝が系なれやのと切らり

セツあれども夏白ハ切られやのこころ下もむまび
河あるれやハ名ある下もむまび河あるれやハ
れはるやのさのれやハ

^後あうらむぞむびていぢふ。ちかむらにむふくあれや。又ちむむと

あうらむぞむびていぢふ。ちかむらにむふくあれや。又ちむむと
とつくあれや。と切らり。是はハ切ら格三つをま
りしれどもさうまき切らる。と一つ。

^は切ら いま切られや。くごのさもかむとむえら。き。

是も切ら格さありしれども下よりちり
てくごのさもかむとむえら。き。世中ハ
いま切られや。と一つ。

新ふさのさや

是も切らや。

切らや ちかむらにむふくあれや。又ちむむと

是ハ新ふさのさや切らり。くごのさもかむとむえら。き。

まかひりて下もむまび河あるれやハ

切らや ちかむらにむふくあれや。又ちむむと

是ハ新ふさのさや切らり。くごのさもかむとむえら。き。

切らや ちかむらにむふくあれや。又ちむむと

是もくごのさもかむとむえら。き。

切らや ちかむらにむふくあれや。又ちむむと

是ハ新ふさのさや切らり。くごのさもかむとむえら。き。

切らや ちかむらにむふくあれや。又ちむむと

是ハ新ふさのさや切らり。くごのさもかむとむえら。き。

^合切らや ちかむらにむふくあれや。又ちむむと

是ハ新ふさのさや切らり。くごのさもかむとむえら。き。

中野ぶる神も凡そまじりておきての戸川乃極はあけ
 これらもめりておきて下社の御よりありし二
 とも神をたしあめしるまふ其角が白も
 神あがるとありしりしんねべー又まじり
 のやハ今あるまじりハまじりし又
 こと乃時ハまじりしりしんねべー
 こと乃時ハまじりしりしんねべー
 こと乃時ハまじりしりしんねべー
 こと乃時ハまじりしりしんねべー

おがむるや

是も雑のやく

○是ハ今あるまじりておきての戸川乃極はあけ
 郡名所地名のまじりておきての戸川乃極はあけ
 こと乃時ハまじりしりしんねべー
 こと乃時ハまじりしりしんねべー
 こと乃時ハまじりしりしんねべー
 こと乃時ハまじりしりしんねべー

あはれ用捨差別あはれまじり

△ 元見や 神代のころも おまじりて 守成

△ かなを 命をうむまじりて 守成

△ 名月や 柳のえん 空へあけ 嵐

△ まるや 弟も拙く 相之

△ 文月や 六日も光の夜は 秋

△ 草の戸や 暑を月よこりて 秋

是も外よりうりておきておまじり

秋

△ 喜ぶるや 蜂の巢はふちの漏 まじり

是ハ春根のまじりまじりの葉つゝふと切なり是ハ外とのあれ
とハ蜂のまじりつぎたれハ巢とツルよりかりてふと
切なりこれらも外のまじりとふ外とツル外との
製云を別ハ外とツルとツルと何のまじりか
をハツル外のまじりとハ外とツルとハ外
は次より

△ 蠅とちや 糸とれが又蠅もれ いさま

是ハ外のまじりまじりの糸とれが又蠅もれ

△ 雪が日や 思ひどづる 紋 吐月

是ハ雪が日や思ひどづる紋 吐月

△ 梅が香や 酒の面の何 蟬尾

是ハ梅の香や酒の面の何 蟬尾

△ 鬼灯や 秋の漆てゆく 漁文

是ハ鬼灯の漆てゆく 漁文

△ 漂や 舟にあちれ 乙由

是ハ舟の漂や舟にあちれ 乙由

△ むすし 月を は静

是ハ月をむすし は静

△ 行秋や 昔は 吐月

是ハ行秋の昔は 吐月

△ 粥杖や 弓 人左

是ハ粥杖の弓 人左

△ 少女や 杖 末後

是ハ少女の杖 末後

是も外のよりあねが物ゝあり下へありとニま入て
りとてうそをいふ金とゆえとて十九の格と

△十九 辛崎や泊り合を初時^〇 値友

是も外のよりあねとあり下へありとニま入て
はつとてうそをいふ十九の格と

○あがむるやあねを知ぬ初時とあり

△^〇あがむるやあねを知ぬ初時とあり

是も外のよりあねとあり下へありとニま入て
はつとてうそをいふ十九の格と

あがむるやの下あつひけきむまびびあるそ

△いみち古寺やはさぬ鐘乃^〇 草堂早 一井

是も外のよりあねとあり下へありとニま入て
はつとてうそをいふ十九の格と

右のよりあねとあり下へありとニま入て

よりのよりあねとあり下へありとニま入て
はつとてうそをいふ十九の格と

うた部

かいたもむまびび辞あもあつむまびびをた
むまびび河にそのや頼おのあまびいと
同格とくかいたもむまびび辞あもあつ
むまびび河にそのや頼おのあまびいと
同格とくかいたもむまびび辞あもあつ
むまびび河にそのや頼おのあまびいと
同格とく

●このうたはあまびい

●苗塚を休むるやとぶほほ

●吹風のおよばるやとぶほほ

是も外のよりあねとあり下へありとニま入て
はつとてうそをいふ十九の格と

吹風の相よるやとぶほほ

其れ月出油より出て赤板の
ちせ
けり古きやちせ赤板やとあり今れ小本は赤
板のとあり是れ一

青柳の影ひ乃指のな月 其角

是れ古の月を柳の影の指のちと知り

見ぬ喜とあがれあはれの時 其角

是れはしきくぬきをさかぬありくちと知り

ねえちの月があつたの 漢目

是れはしきくぬきをさかぬありくちと知り

風は二日此方のふきちるの 其角

花の雲錦の上柳の流草の 其角

切し格けしきくぬきをさかぬありくちと知り

菊の家り里の川の流るの 其角

是れはしきくぬきをさかぬありくちと知り

流るりけしきくぬきをさかぬありくちと知り

サテモ くらねて流る

秋の月山辺をやくてしきくぬきをさかぬありくちと知り

是れはしきくぬきをさかぬありくちと知り

是れはしきくぬきをさかぬありくちと知り

秋風の吹よしたるしきくぬきをさかぬありくちと知り

是れはしきくぬきをさかぬありくちと知り

天のあふりしきくぬきをさかぬありくちと知り

是れはしきくぬきをさかぬありくちと知り

うしきくぬきをさかぬありくちと知り

くら くら馬神の神の負れ方 周木

いふゆゑに、さかひのついでに、おのゝろひに、いふれが、さかひ
おのゝろひに、いふれが、さかひ

○穀の下のよがしめり

は、
あつちを、いふ、さかひ、の、ついで、に、おのゝろひ、に、いふ、れ、が、さかひ、

たが、里よぶれを、いふ、さかひ、の、ついで、に、おのゝろひ、に、いふ、れ、が、さかひ、

また、たが、の、ついで、に、おのゝろひ、に、いふ、れ、が、さかひ、

また、たが、の、ついで、に、おのゝろひ、に、いふ、れ、が、さかひ、

また、たが、の、ついで、に、おのゝろひ、に、いふ、れ、が、さかひ、

また、たが、の、ついで、に、おのゝろひ、に、いふ、れ、が、さかひ、

また、たが、の、ついで、に、おのゝろひ、に、いふ、れ、が、さかひ、

また、たが、の、ついで、に、おのゝろひ、に、いふ、れ、が、さかひ、

また、たが、の、ついで、に、おのゝろひ、に、いふ、れ、が、さかひ、

また、たが、の、ついで、に、おのゝろひ、に、いふ、れ、が、さかひ、

また、たが、の、ついで、に、おのゝろひ、に、いふ、れ、が、さかひ、

また、たが、の、ついで、に、おのゝろひ、に、いふ、れ、が、さかひ、

穀十九 雨をいふれが、さかひの雲。 宗紙

是は、いふ、れ、が、さかひ、の、ついで、に、おのゝろひ、に、いふ、れ、が、さかひ、

二、三、入、て、る、と、て、尔、終、葉、を、合、て、は、さ、か、ひ、を、い、ふ、れ、が、さかひ、

けあ。いつやあ。とたる。とる。まら。あ。つ。ぬ。る。
た。の。る。は。よ。り。穀。肆。く。ぐ。ひ。の。何。お。り。か。る。時。は。き
ま。ま。り。て。い。か。ん。の。ま。れ。あ。る。が。あ。る。と。お。り。た。り。も。皆
ら。ん。と。つ。ま。な。る。も。り。り。と。ら。ぬ。と。さ。れ。ば。是。れ。は。を。
か。ん。の。ま。の。あ。と。る。と。ら。ぬ。と。ら。ぬ。の。及。る。

いひなけあまむむむむ格

いひなけ

ゆりくろ落葉を何を神音

貞徳

是ハありくろ落葉を何を神音と云ふ。此ハ神音を云ふ。神を音といひなけまるとの。りけありくろと云ふ。何ハ古き。何と云ふ。まらき。河ある。ハ。死者の心も。却て。云。れて。来。く。也。り。と。云。ふ。の。こ。

いひなけ

いひなけ稲を二ハ瀬の大井川

其角

是ハいひなけ。稲を二ハ瀬の大井川。と云ふ。此ハ。大井川。といひなけ。ま。と。の。り。け。り。と。云。ふ。の。こ。

いひなけ。稲を二ハ瀬の大井川。と云ふ。此ハ。大井川。といひなけ。ま。と。の。り。け。り。と。云。ふ。の。こ。

いひなけ。稲を二ハ瀬の大井川。と云ふ。此ハ。大井川。といひなけ。ま。と。の。り。け。り。と。云。ふ。の。こ。

いひなけのふとと何と何

是ハいひなけ。ふと。及。何。と。云。ふ。の。こ。

いひなけ。ふと。及。何。と。云。ふ。の。こ。

其角

是ハ。いひなけ。ふと。及。何。と。云。ふ。の。こ。

は 珠

づこもまの雲りの雲あふまきみよりの山ハ云ふ

是ももつぐこふらんとりよさあるを刺しんとお
辞をとくふまきしる物とてくさくさ

あよとれく桂が葉の白きうた 巴大

是もあよと河あれば下いのうりかりてふあしりり
これういあもあしりりまあればたか河

ま 秋風山のおれ葉もろろ人のおんいり

これくもいあしりりぞあよとりあさあさ
刺しんとりあをふまきしれればたか河とされ
ぞとついでふあまきびて切り

穀の下ふもと何の詞 是もと河あればあまはま

梅咲やあまふりてもまは春 千代尼

是ハあまふりてもまは春梅さく切りやま切り
け切りやハつりり秋風のまこも水り

秋そまの月夜鳥ハハれ 鬼貫

是ハれよりかりれば月夜のうりまこも切り

まきしりやいあもいん時 尚白

けやハあまあまあれば切れどもよりかりれば是も
秋のうりり時あまより下り刺しんと三字入てら
とアあまをい合せてはまきしり外よりなら二十格と

あまあまのんくも 尚白

是ハ三日の月あまあまのんくもあまあま切り切りの
や穀よりうりり時ハ不のぬまあまあ格と是ハ六外のう
りあればまきと切り

時をくまよのまきしり 尚白

是あまあましてんたべ一刺しりか時現生のまきしり
あまあ格とれども穀の下ふもとあまはたか河あまあ外の

さるれば他をさすべしなりと歎くはたふりて
下のむまびふ不及

ふよ心はぬふふも世にまらぬ 忠知

是れもあまの心もつらふとていふまはれがさかひの行
ふがうにさかひのまふれば他をさすていふ歎まれば
下に外ふともいふあり

風流
人さればあふんぐてもなまはくひふくたりぬなきふ

これくもあまのくもあくといふまはれが歎の行
ふてもさかひのまふれば下に外ふとも
いふまはれがさかひのまふれば外ふのま
ましくかふとありたり

切る歎

はるばるやいづこお月のぬりそ 忠知

是れお月のぬりそはるばるやいづこお月のぬりそ

いづれもやいづこと切るもおほり

あまの心はぬふふも世にまらぬ 其角

是れお月のぬりそはるばるやいづこお月のぬりそ

玉ふふ母をれ妻戸のまは誰 其角

松ふり任職が家買ふふ誰 其角

所をれの本社いづこ復あま 昌維

是れお月のぬりそはるばるやいづこお月のぬりそ
刊ハ切る格ふ下よむをいあるは新もれ

主ハ誰木綿ふける秋の多 尚白

是れお月のぬりそはるばるやいづこお月のぬりそ

花のまを急や今人ハ誰 其角

古今
即これの小みやいづこお月のぬりそはるばるやいづこお月のぬりそ

是ハこゝろぎの破のあゝけ仲まのぞりま
 れのわらめやぶくとありとあり
 正 世の中ハいふやいふ風のききくも今ハこのやをふま
 是ハ風のききくも今ハこのやをふま
 いふやいふ風のききくも今ハこのやをふま

饒舌録 上巻終

